

『キリストの体としての教会』(一コリ 12:12~26)

パウロが教会のことを「キリストの体」と呼んでいることは大変有名なことです。パウロは、一つの体が多くの部分から成っているということを、教会を説明するための単なる比喻としてではなく、「キリストの体」という一つの具体的な体として述べています。教会こそキリストの体であり、そこに連なる私たちは文字通りその部分なのです。パウロは、「教会という体は単に各部分の結合、集合によって組み立てられ、生じているのではなく、個々の部分の一つの体である教会の中に組み入れられている。そして、その各部分に違いがあることを前提にして、体は一つであり、キリストの体にあっては各部分の差別はない。」と述べています。洗礼を受けることによって、民族的あるいは社会的差異などをもっている私たち、各部分は、差別がなくなり、一つの体、キリストの体へと組み入れられ、その部分となるのです。「皆一つの霊をのませて」という言葉は、聖霊が私たちの外側にいて働くだけでなく、私たちの内に宿って、内側から私たちを作り変えることを表現していると思われます。各部分である教会員が集まって、それが結合して組み立てられ、体である教会ができるのではないのです。私たちは、予め与えられた「キリストの体」に組み入れられるのです。それがパウロが述べた体は二つの方向(一から多へという方向と多から一へという方向)を同時に持っているという意味だと考えられます。つまり、教会はキリストが作るもので、信仰者はそれに参与するのです。私たちはそれぞれなりの賜物、力、働きが与えられています。神さまが様々な違った者たちによって一つのキリストの体を作り上げようとしているのです。従って、自分に与えられている賜物を他人と比べる必要はありません。神さまから与えられた自分の賜物を精一杯用いていけばよいのです。

パウロがここで語ろうとしている最も大事なことは、キリストの体の部分として、キリスト者と共に歩むことです。教会においてどんなよい働きができるか、ということは大事ではないのです。神さまは、私たちが、どんなに弱い、見劣りがする者であっても、他のキリスト者と共にキリストの体の部分として生きることを望まれます。反対に、どんなに優れた能力を持ち、立派な奉仕をすることができるとしても、それが個人プレーとなり、キリスト者と共に歩むことを忘れるならば、神さまはそのような働きを望まれないのです。教会の一人ひとりはお互いの違いを認め合って、支え合い、助け合っていかなければならないと思うのです。